

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

調査の経緯と総括

SGRA代表 今西淳子

【経緯】

日本の大学院で勉強した留学生のネットワークを基に設立したSGRA（関口グローバル研究会）では、インターネットのネットワークを使って、小泉総理大臣の靖国神社参拝について、会員の意見を集めた。このプロジェクトのきっかけは、このままでは、とんでもないことが起きかねないという、私自身の危機感であり、この原稿をまとめている7月14日現在、教科書問題も絡んで事態はさらに悪化しているように見える。

○呼びかけ（6月26日Emailで発信）

SGRA会員のみなさま

小泉総理の靖国神社参拝について皆様のご意見をお聞かせください。小泉総理大臣の高支持率も不気味ですが、靖国については本当に憂慮すべき問題と認識しています。近隣諸国の国民感情や今までの歴史の経緯を全く無視して、構造改革と同じ手法で強硬に物事を進めてしまえば、取り返しのつかないことになる危険があるのではないかと心配しているのは私だけでしょうか。

このような漠然とした問いかけであったが、以下の14名の方々からお返事をいただいた。（投稿順）

- 1 ビトヨ・ハルトヨ(インドネシア)
- 2 フェルディナンド・マキト(フィリピン)
- 3 徐 向東(中国)
- 4 並木隆史(日本)
- 5 匿名
- 6 Y・T・スリ・スマンティオ(インドネシア)
- 7 葉 会(中国)
- 8 林 泉忠(中国/香港)
- 9 葉 文昌(台湾)
- 10 南 基正(韓国)
- 11 鄭 成春(韓国)
- 12 呉 東鎬(中国)
- 13 ブレンサイン(中国/内モンゴル)
- 14 高 熙卓(韓国)

この間、6月27日にSGRAアドバイザーをお願いしている朝日新聞コラムニスト、船橋洋一氏の「Coming to Terms with the Past: Japan's Foreign Policy」という講演会があり、28日に、この講演会メモを会員に送付し、今後どのようにしたら良いか、現実的かつ未来志向的な解決策を投稿してほしいと再度呼びかけた。（メモは付録1参照）

最後に、7月8日～10日に北京で開催された「近代日本の内外政策」に出席した曾支農さんがレポートを送ってくださったので、付録2として添付する。ご参照いただきたい。

忙しい研究生活をぬって投稿してくださった皆さんにお礼を申し上げると同時に、文章の流れの都合から、全員のご意見を「総括」の中に採用できなかったことをお詫びします。

【総括】

ここでは、14名の方々から寄せられたご意見と船橋氏の講演会メモを引用しながら、「対話」をキーワードに纏めていきたい。また、「多様性の中の調和」を理念としてグローバル化社会への対応を考え「地球市民の実現」に貢献することが、このプロジェクトも含むSGRAの活動の基本的な目的であることを、最初に確認しておきたい。

前置きが長くなって恐縮だが、「対話」を可能にするためには、理解し合える「言葉」が必要なのは言うまでもない。船橋氏が日韓に比べて日中の歴史問題解決の難しさを説明される時、「木の言葉」というフランス語を引用される。イデオロギーでもって決裁していく中国共産党は「木の言葉」を使っているから、本当に理解し合うのは難しいということである。森喜朗政権末期「永田町言葉」というのがマスコミを賑わせたが、これは多くの一般市民にとって、理解することが非常に難しかった。いわば「紙の言葉」であった。小泉総理の絶大な人気は、やっと「人間の言葉」で話す政治家が現われたという国民の期待であるのは間違いない。グローバル化が進む現代社会において、より多くの人が理解できる言葉を用いることが、政治家の使命であるという前提に基づき、靖国問題について、それぞれがどんな「言葉」を使って「対話」を進めようとしているか（或いは対話を拒んでいるか）、検証していきたい。

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

呼びかけをして間もなく、並木隆史さん（4）から、「アンケートの対象には入りませんが発言させて下さい。」というメールが届いた。

靖国神社参拝も教科書問題も日本人はどうしてことさらに「近隣諸国の国民感情を・・・」という発言、行動をとるのでしょうか？それが国益を損なう行動です。日本が気にするから向こうは騒ぎ出し、日本は騒がれたくないから及び腰になってお金を出すと、相手には失礼な解決方法をとることになってしまいます。

船橋氏によれば、「日本人の90%が小泉総理の靖国参拝を支持し、近隣諸国が批判すればするほど支持率はあがるだろう。それほど、日本人は、近隣諸国からの『teaching』にうんざりしてしまっている。」（付録1）ということだが、並木さんのメールは、多数の日本人の気持ちを代表するものと歓迎したい。並木さんのメールと同時に、徐向東さん（3）からは、「戦争責任の清算は、外国への配慮よりも日本人のためです！」というメッセージが届いた。

いったい誰が、何の目的で戦争を起こし、日本のごく普通の人々とアジア諸国のごく普通の人々とが銃を向き合わせ、多くの人々の命を失わせたのでしょうか。せめてこれぐらいの責任論ははっきりさせるべきでしょう。この程度のことでもせずに、戦争を起こした責任者と普通の兵士たちを同じ神社に祭り、それに、日本の代表である首相がそこに行って参拝を行う。こんなことまでして、いくら口では、日本は平和の道を選んだと叫んでも、どのようにして、外国から信用されるのでしょうか？

このような対立状況を、鄭成春さん（11）さんは、

日本人はもううんざりしているし、近隣諸国も日本の態度にまたうんざりしています。もう相手にしたくないと思うほど、人々は感情的に対立しているわけです。

と描写する。徐さんに限らず、多くの投書が問題としているのは、A級戦犯が合祀されている点であり、それを日本国総理大

臣が参拝することは、戦争責任をあいまいにすることに他ならないという意見である。マキトさん（2）は、次のように分祀を提案している。

戦没者への参拝について、私は異議ありません。彼らは二重に偉いと思います。国のために命を捧げたことと、事実を知らされずに愚かな指導者たちのおもちゃにされたのに一生懸命戦ったことです。しかし、靖国神社には戦犯（愚かな指導者たち）も入っているそうですので、靖国神社での参拝は戦犯者の参拝にもなるでしょう。従って、戦犯を含む靖国神社への参拝（公式かどうかにも関わらず）は、彼らが起こした悲劇的な戦争を認めることになるので、許すことができないと思います。この意味で、私は民主党の提案に賛成です。つまり、戦犯とそうでない人の参拝用の場所を分けるという提案です。そうすれば、安心して戦没者への参拝ができるでしょう。

さらに、呉東鎬さん（12）は、靖国について、以下のように中国政府観点をまとめてくださっている。

靖国神社は日本の近代史における対外侵略の象徴であり、現在もA級戦犯が合祀されている。日本が靖国神社参拝問題にどのように対処するかは、単に日本の国内問題であるだけではなく、日本政府が過去の侵略の歴史にどのような態度を取るかを検証する試金石であり、同時に中国をはじめ、戦争の被害を受けた国の広範な人民の感情に直接かかわるものである。

呉さん（12）は、さらに続けて、以下のように説明する。

日本の一般国民として、靖国神社に向かったとき、本当に純粋な戦没者に対する哀悼と戦争に対する反省の気持ちが湧いてくるのでしょうか？疑問が残ります。戦後、確かに軍国主義精神は全面的に否定され、靖国神社も形だけではただの普通の神社になっていたが、実際にもそうになっていたかは疑問があります。私は、むしろその反対の方向へ行ってしまったのではないかと思います。特に、右翼勢力が靖国神社へ手を突っ込んでからは、日本国民から段々離れてしまい、むしろ軍国主義が生き残る場になってしまったのではないかと思います。だから、日本の政治指導者があそこを参拝すること自体は、その人がどんな動機

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

を持っているかには係わらず、一つの客観的効果として、「軍国主義精神」を主張する右翼勢力の助長となり、更には、将来日本政府の歴史観の構築にも影響が出てしまうのではないかと、中国側が懸念するのも一理があると思います。

さて、何故A級戦犯が合祀されているかという問題であるが、靖国神社のホームページに掲載されている「A級戦犯とは何だ！」では、以下の5点が主張されている。①A級戦犯という言葉は、日本の国内法に基づいた言葉ではない。②東京裁判は国際法を無視した不当な裁判である。③サンフランシスコ対日平和条約の「受諾」の意味は、東京裁判を認めたものでない。④一部の政府関係者は、A級戦犯を合祀した靖国神社が悪いようなことを言うが、神社は国が「公務死」と認めたことを踏まえ、一般戦没者と同様に「昭和殉教者」として合祀している。⑤昭和28年当時から、政府は戦犯者を、国内的には、犯罪人と認めていない。

小泉総理大臣が、靖国神社を公式参拝することは、靖国神社のこのような主張を認めることであるから、

靖国神社の公式参拝は敗戦処理への不服表示であり、既存国際秩序への挑戦である。国際社会の重要な一員として責任のある日本政府が決して為してはならない。

という葉さん(7)の主張に繋がってくるのだと思う。靖国神社の「杜の言葉」は、それなりに筋が通っており、一宗教法人として、ホームページで堂々と主張するのは評価できるのではないかとさえ思う。しかし「杜の言葉」は、当然国際共通語とはなりえない。日本国を代表する言葉にはなりえない。これに比べ、靖国神社も指摘しているように日本国政府の立場は、いかにもあいまいである。勿論、これは宗教法人としての立場と、政府としての立場の差があり、大変に複雑で解決困難な問題であることは、何よりも今までの歴史が示している。その中で、小泉総理の靖国参拝問題が、突然起きてしまった。マキトさん(12)が言うように、「何で今さら」という気持ちは、多くの人の気持ちであろう。

小泉さんたちは、あまりにも自分たちが改革派であると訴え

すぎている気がします。しかしながら、改革の基本方針からして、グローバルな課題に配慮しているとは、私には思えません。今や、外交的には、問題が山積みです。京都議定書をどうするかとか。ミサイルの拡散をどう防ぐとか。日本国憲法の平和主義の啓蒙とか。グローバル化における日本の役割の強化とか。小泉総理大臣の靖国神社への参拝は、日本が大いに国際貢献すべき上記のような分野に対して、促進するどころか、逆戻り効果ばかりを与えかねないという懸念を抱いています。

さらに、高熙卓さん(14)が分析するように、

意識的であるにせよ無意識的であるにせよ、首相の今の姿勢は従来の靖国参拝か否かといった二者をある意味では徹底化するものであって、その視点のままでは問題は解決できず、むしろ靖国参拝への穏当な理解さえも得られるはずがない。それどころか、その視点が、一方の満足は他方の不満を伴うといったゼロサムゲームのような構造をもっているため、その問題をめぐる葛藤は一層複雑になっていく恐れさえある。

小泉総理が「戦争を美化したり、正当化する気持ちは全くない。二度と戦争を起こしてはならないという気持ちから、戦没者に哀悼の気持ちをささげたいという考えだ」と言っていることに對して、呉さん(12)は以下のように指摘する。

首相のこの主張は、単純な「動機論」「感情論」であり、そもそも歴史問題にもならないと思います。たぶんこの言葉自体を否定する人は(良識ある中国人を含めて)誰一人もいないでしょう。だから、90%の日本国民の支持を得ていることは当たり前で、そんなに驚くべき問題ではないと思います。

そして、小泉総理の主張と、中国政府の主張を比較した場合、

両者は全く違う視点からの主張であり、そもそも正面からぶつかっていないでしょう。そのままの意見交換になったら、永遠に問題解決ができないと思います。

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

「言葉」が通じていない。

同じ「土俵」の対峙になっていない。

今回の靖国問題について、近隣諸国の態度が急に変わったとは思えない。むしろ、小泉総理が単独で起こした問題のように見える。上述のように、小泉総理の「言葉」の内容は明白で、近隣諸国の人さえも支持するものであろうから、問題はその「言葉」に対する実行方法の妥当性にあるといえよう。さらに問題が深刻なのは、小泉総理が、「このような問題はなかなか解決できないものだから、靖国神社に参拝した後で、協力関係を維持発展できるか考えた方がいい」という、一国の総理大臣の発言とは思えない、びっくり仰天するくらい鈍感な方針を表明していることである。一度こじれてしまった国家間の関係をとりもどすために、膨大な時間とエネルギーが必要となることは、何よりも先の戦争が雄弁に語っているのではない。

しかも、日本人の90%が支持するという小泉総理の「言葉」の信憑性にも不安がないわけではない。高さん(14)は、日本軍の軍人・軍属戦死者のなかで、死因の6割が餓死と栄養失調だという最近の研究を紹介し、

名誉戦死の名に隠された「戦死の実態」はじつに暗くて重い。それにもかかわらず、首相自身が公然と「特攻隊」を深い犠牲の典型としてたたえることは、それが自己規律の指導者倫理を首相自身に課したようなものであったとしても、こうした戦争犠牲の影のところに隠蔽し、現実の生から離れた「死の美学」のようなものを、とくに若い人々に植え付けることにはならないだろうか。しかもそれによって、あらゆる戦争犠牲に対して、小泉首相の靖国参拝はまるで序列を与えて区別するようなものになりはしないだろうか。

そのような懸念は不要であるというのは、葉文昌さん(9)である。このような意見は、今回は少数派であったが、アジアの新しい声として注目すべきであると思う。

戦犯は全体の少数です。そして彼らはすでに戦後に処罰を受けています。靖国神社に祀られる人間は、正しいと思って、国のために自分の生命を犠牲にした人間が大半を占めています。先祖に対し敬意を持つことは、どこの国でも共通で、小泉総理も

戦犯を祀るために行くのではなく、国のために正しいと思って戦った人を祀るために行くのだと思います。日本としては近隣諸国に対して、迷惑を掛けたことは認めており、だからといって国のために犠牲となった先祖までも無視させるのはおかしいと思います。

日本には今、自分の国に対する誇りや愛国心が必要です。これは右傾化ととらえられますが、実際には米国や近隣諸国のそれと比べると、ぜんぜん右傾化と言えません。(略)日本の軍国主義台頭の危惧については、全くその心配はないと思います。これは日本が民主国家であるからです。日本に留学したことがある人間なら、日本から戦争を仕掛けることはありえないことはわかると思います。また戦後から今まで、民主国家が仕掛けた戦争は一件もありません。すべてが、独裁国家が仕掛けた戦争です。

同様な意見は、ブレンサインさん(13)からも寄せられている。

日本人にも日本人としての立場がある。親が悪いことをしたからと言っても、その子供たちにとっては育ててくれた大切な親であるには変わらない。だからお盆ぐらいその親の墓に参拝してもいいだろうと思う。近隣諸国の感情を考慮する必要はあるが、しかし多極化した国際社会のなかで今日本は自己確立を求めている最中にある。右翼化傾向にあるということのも立場を変えればこのように解釈する事ができよう。

そして、現実的で未来志向的な解決案として、国立墓地の建設を提案している。

誰でも気軽に参拝出来る日本の国立墓地を早急に設立し、靖国神社の存在を薄くしておく必要がある。こうして戦後処理のしがらみを一つ一つなくしていくことが、結局日本の自分探しにつながるのではないかと思う。つまり戦前の問題をいつまでも政治のカードに使うとする日本の少数の右翼と近隣諸国の無責任な政治家たちに事柄を与えないで済む。

国立墓地の建設の提案は4名の方から寄せられている。呉さん

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

(12)は、「民主的色彩の透명한戦没者公園」を提案するが、犠牲者の中に民間人も含めるべきという高さん(14)の意見には、注目すべきであろう。

戦没者慰霊において主導者が犠牲者かを区別すべきではなく、その意味で靖国参拝がそのまま戦争の肯定や美化にならないといわれるかもしれない。靖国には、とくに女性、老人、子供などの戦争犠牲者の象徴である犠牲者が祀られていない。「平和や戦争防止」と両立する戦没者への慰霊を掲げながら、日本政府の代表が「公人として」参拝するには靖国はあまりにも代表性に乏しく一方に偏っているのではないか。

という新しい視点から、次のように提案する。

軍・民を問わず、ひとつの場所ですべての戦争犠牲者を祀ることのできる「国立墓地」を新たに造成することはどうだろうか。モデルとしては沖縄にある「平和の礎」を参考にしながら、靖国と千鳥ヶ淵を合わせた形の墓地にすることも可能だろう。公式参拝地がそのような新しい「国立墓地」に替わることによって、一方では、軍国主義風の靖国にまつわる内外の憂慮も払拭できるし、他方では、「日本人としての当然のこと」としての慰霊・追悼がより全国的にスムーズに行えることだろう。しかも、そのような軍民共同の「国立墓地」造成は、戦争犠牲を誇りに思う遺族においても戦争犠牲者における女性、老人、子供などの存在の意味を新たに吟味させる教育の現場にもなるだろうし、また内向きの靖国よりは外国の外交使節や一般の人々も参拝できるような開かれた慰霊の場所にもなることだろう。

戦争における主導者と犠牲者の区別について、スリ・スマンティオさん(6)は、

隣国から見れば靖国神社に祀られた人々は戦犯と思われるが、日本の立場から見ると彼らは英雄です。どこの国でもこんな考え方があります。

と指摘する。日本の一般国民には戦犯を英雄とするよりは、戦争の責任者と見る方が強いとは思いますが、同情論、或いは小泉総理自身が主張するように、「日本国民感情として、亡くなると

すべて仏様になる。A級戦犯は現世で死刑という刑罰を受けている。死者をそれほど選別しなければならないのか」(朝日新聞7/12)という、独自の文化論、或いは死生観は根強いように思える。グローバル化の進む現代社会において、文化の多様性を相互に尊重するのは基本である。しかし、それ以上に大切なのは、共通に理解できる言葉を使ってお互いに納得するまで「対話」を進める努力であろう。

興味深いのは、「日本人はどうしてことさらに『近隣諸国の国民感情を・・・』という発言、行動をとるのでしょうか?」という並木さんも同じ提案をされていることである。

戦没者だけでなく東京大空襲でなくなった方を含めた慰霊碑をつくり、米国をはじめとして外国の要人にもお参りしてもらえるようにしたいもの。

戦争の英霊だけを祀るのではなく、戦争犠牲者を哀悼する場としての墓地・・・戦争で犠牲になった人は、軍人も民間人も、男も女も、老人も子供も、さらには国籍にかかわらずに、慰霊されるべきであり、この方々のおかげで、今日の平和と繁栄があると感謝する場にすべきなのではないか、というのは十分に国際的に通用する言葉で語れると思う。しかも、非常に未来志向的であり、「平和主義」を掲げた日本が、世界に先駆けてとり得る解決策であると言えるのではないか。従来の国家の枠組みから離れて、ここまで広いビジョンを掲げることができれば、

大日本帝国軍人の犠牲のおかげで日本国の今日の繁栄と平和がもたらされているという発想が可笑しい。「哀悼」、「感謝」、「尊敬」の気持ちを、アメリカをはじめとする同盟国軍の兵士、中国や韓国などアジア諸国の戦士たちに捧げるべきではないか。彼らの尊い命の犠牲がなければ、今日の日本国はあるはずがない。

という、近隣諸国の多くの人々の意見を代表すると思われる葉さん(7)の意見さえ、包含することが可能になるのではないか。

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

今年の8月15日には、建設は間に合わないが、小泉総理は、せめてそれまでにこのような国立の慰霊の場を建設することを表明してほしい。そして、もし、その代わりに靖国神社に参拝しなければならぬのであるならば、先の戦争で多大な犠牲を与えた近隣諸国によく説明することが第一に必要であろう。

最後に、国立墓地建設の他に提案された解決策を紹介する。

○サイエンスとしての歴史 ハルトヨ（1）

お互い歴史をscienceとして扱うことです。Scienceとして扱われるからには感情の入る余地はありません。その代わり、真実を追究する義務が発生します。

○歴史の共同研究と現代史の博物館の建設

スリスマンティオ（6）

日本をまわったら、縄文時代や弥生時代や伝統的な作品などを展示する博物館が数多くあります。しかし、太平洋戦争に関する博物館が数少ない。逆にアジアの国々の博物館を見学すると、ほとんど太平洋戦争に関する博物館ばかりが目に入ります。たしかに、日本には戦争のことを忘れようと思っている方々が大勢いると思います。しかし、日本軍に精神的かつ肉体的に傷つけられた隣国に暮らしている方々は、まだ大勢元気に暮らしています。これは良い機会だと思います。まだ生きている間に、みんなで新しい歴史を作ろう！

○「戦後平和主義」の再生・再構築 南基正（10）

○日本政府が中心になる国際的過去清算委員会の設置

鄭成春（11）

日本が率先を見せることが必要であると思います。なぜなら、これらの問題の解決に日本の責任がより大きいからです。また、それほど社会が成熟しているからです。

日本政府が中心になる国際的過去清算委員会を大々的に設置し、その委員会が過去に何があったか、それに現在かかわっている人たちは誰なのか、その人たちは今何を求めているのか、その問題を解決するためにどうすればいいのか、これらの問題に対して誰が責任を持つべきか、といった問題に真剣に取り組むべきであると思います。また、委員会の活動、そこで明らかにな

った事実や情報はすべて広く公開し、国民の教育のために活用すべきなのではないでしょうか。

韓国や他の近隣諸国の弱者に対して、日本政府、裁判所はこれまで冷たい態度しか見せてきませんでした。しかし、不思議なのは、アメリカのような大国に対しては、日本の立場をきちんとさえ、どの場面でもアメリカ追随主義という二律背反的な態度を見せてきました。「弱者には強く、強者には弱く」、それがこれまで日本政府が見せてきた、過ちを犯さない国の姿でした。このままでいいのでしょうか。このような態度を見る近隣諸国の国民は、日本政府を、いやひいては日本国民を、きつと卑怯者と思うでしょう。強い国、指導的国になるためには、逆に、「強いものには強く、弱いものには哀れみ深く」といった、国の政策転換が求められていると思います。また、近隣諸国は、日本人の多くが実は被害者であったことを認め、その上で、被害者同士が過去の痛みを如何に直していくかについてより協力的な姿勢をとることが望ましいのではないのでしょうか。私は、このことを実現できる政治体制が早く構築されることを待ち望んでいます。

○総理のアジア諸国の慰霊の旅 高照卓（14）

アジア諸国の戦没者への慰霊は欠かせない。吉田秀和氏のいうように、「まず隣人たちの国の犠牲者を丁重に弔ってくる」（朝日6月22日夕刊）といった旅を実践してみてもはどうだろうか。「懺悔と和解のための共同慰霊の旅」と名づけて首相自らアジア諸国を廻ることだ。

【おわりに】

ここで行ったのは、インターネットを用いた「ささやかな対話の試み」である。私のEmailの呼びかけに答えてくれた殆どの方が、日本の大学院から博士号を取得するために研究をしているか、学位取得後大学等で教えている。彼らは既に5年から10年くらい滞日しており、日本語の達者な、30歳代から40歳代前半の、若手研究者である。彼らは、祖国と日本との「掛け橋」ともいべき立場にあり、彼らの後ろには、日本のことを全く知らない、或いは、偏った情報で日本を判断している15億人を超える人達がいることを忘れてはいけない。

講演会で、船橋氏は、「民主化が進むにつれ、それまでは上か

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

ら押さえつけられていた歴史問題や民族問題がふきだしてきた。従って、この傾向はさらに強まっていくだろう。」「歴史問題は、日本だけの問題と考えるべきではない。しかも国家や民族の根幹にかかわることなので、軽視してはいけない。多文化主義・多民族主義が広まっていく反作用として、必ず繰り返し生じる問題だろう。民族や国家が侵害された過去の戦争への謝罪要求は、いつまでたっても終わることはないだろう。」と指摘された。

犠牲者の無念が人々の記憶に残っている限り、戦争責任問題は何時までたっても終わらせることはできない、だからこそ、決して戦争は起こしてはいけない、と考えるべきなのであろう。逆に言えば、二度と繰り返さないために、歴史は記憶されなければならない。しかしながら、このグローバル化が急速に進む世界で、歴史問題への対処法は、おそらく50年前にし忘れたこと(或いはするのを怠ったこと)を埋め合わせるのではなく、50年前とは全く違った理念に基づく解決法になるのではないかという気がする。大掴みに言えば、それは、国家よりも人間に焦点をあてる試みとなるのではないかと思う。

この「ささやかな対話の試み」は、新しい解決法への希望を私に与えてくれた。ここに集められたアジアの若者の声を、ひとりでも多くの日本の方々に伝え「対話」のきっかけを作っていくのが、SGRAの役割であると信じている。そして、もし小泉総理に思いが伝わるのであれば、どんなにやっかいな問題であるとしても、歴史に向き合い、アジア諸国と対話を続けようという強い意志を示していただきたいと思う。

【投稿メッセージ】

(1) ピトヨ・ハルトヨ (インドネシア)

先ず、靖国参拝がなぜ問題にされなければいけないかは私には理解できません。

日本の総理大臣が靖国神社に行くのと、アメリカの大統領がArlingtonに行くのがなぜ同じではないのでしょうか？参拝して

いるときに小泉さんは誰の為に祈りをするのかは判りませんが、一人の人間として祈りする権利が彼にもあります。靖国神社には、自分の意志と関係なく国の為にお亡くなりになった方も大勢眠っています。個人ではなく、総理大臣として国の為に命を落とした方々の為に祈りするのはなぜ問題になるのでしょうか？

靖国参拝の件で近隣諸国からはよく「日本政府は侵略戦争を美化し、反省が足りない」というような声がありますが、「反省」というのは物理量ではないので、足りるか足りないかを計測できる手段はありません。従って、この無駄な議論は平行線をたどったまま永久に続くでしょう。これを解決する手段の一つは、お互い歴史をscienceとして扱うことです。Scienceとして扱われるからには感情の入る余地はありません。その代わり、真実を追究する義務が発生します。すべての人間を満足できる歴史観を作り出すのは難しいと思いますが、scienceという枠組みから出なければ極めて真実に近い歴史を再構築するのは不可能ではないと思います。歴史を、軽蔑や憎しみあうための道具ではなく、そろそろお互いが学ぶための道具にする必要があるのではないでしょうか。

(2) フェルディナンド・マキト (フィリピン)

戦没者への参拝について、私は異議ありません。彼らは二重に偉いと思います。国のために命を捧げたことと、事実を知らされずに愚かな指導者たちのおもちゃにされたのに一生懸命戦ったことです。しかし、靖国神社には戦犯(愚かな指導者たち)も入っているそうですので、靖国神社での参拝は戦犯者の参拝にもなるでしょう。従って、戦犯を含む靖国神社への参拝(公式かどうかにも関わらず)は、彼らが起こした悲劇的な戦争を認めることになるので、許すことができないと思います。

この意味で、私は民主党の提案に賛成です。つまり、戦犯とそうでない人の参拝用の場所を分けるという提案です。そうすれば、安心して戦没者への参拝ができるでしょう。宗教のことはあまりわからないが、可能であれば、ぜひこの提案を実現していただきたいと思います。

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

この間テレビで、小泉さんのメール・マガシンの担当者(?)が、今度の総理の参拝は実は戦犯者の参拝ではありませんと説明していましたが、宗教のことはよく分からないですが、このような説明は宗教的にも筋が通るのでしょうか。

小泉さんたちは、あまりにも自分たちが改革派であると訴えすぎている気がします。しかしながら、改革の基本方針からして、グローバルな課題に配慮しているとは、私には思えません。今や、外交的には、問題が山積みです。京都議定書をどうするかとか。ミサイルの拡散をどう防ぐとか。日本国憲法の平和主義の啓蒙とか。グローバル化における日本の役割の強化とか。小泉総理大臣の靖国神社への参拝は、日本が大いに国際貢献すべき上記のような分野に対して、促進するところか、逆戻り効果ばかりを与えかねないという懸念を抱いています。

(3) 徐 向東 (中国)

戦争責任の清算は、外国への配慮よりも日本人のためです!

先週土曜日の朝、テレビの討論番組で、拓殖大学の某教授は、(中韓など)外国が「小泉首相の靖国神社参拝に文句をつけることは、日本の内政への干渉です」というコメントを話していました。本当にびっくり仰天させられました。いかにも陳腐でナンセンスな話です。今、大学で教えていますが、先々週、学生は、「歴史教科書改訂問題」について発表してくれました。その時に、私も歴史教科書や靖国神社参拝に関する中韓などアジア諸国の反応にふれて、それらの国家や地域は、いずれも当時の戦争の当事国であり、それについて意見を発表するのは、当然のことであるとの意見を述べました。基本的な人権や民主主義の理念を守るために、たとえ当事者でなくても、意見を述べる権利はあると思いますし、ましてや、当事国である以上、意見を述べることは当然の権利です。それを内政干渉という口実で拒もうとする態度には、人間としての基本的な誠実さが欠けているとしか思えません。

首相の靖国神社参拝をめぐる議論以前に、私は、戦争の終結から半世紀以上も進んでいるにもかかわらず、民主主義国家であ

る日本は、今日になっても、戦争の責任をうやむやにしていることについて、理解できません。東京裁判は公平に行われたかどうか、南京大虐殺の死者の数字はどうか、といったような議論より以前に、いったい誰が、何の目的で戦争を起こし、日本のごく普通の人々とアジア諸国のごく普通の人々とが銃を向き合わせ、多くの人々の命を失わせたのでしょうか。せめてこれぐらいの責任論ははっきりさせるべきでしょう。この程度のことでもせずに、戦争を起こした責任者と普通の兵士たちを同じ神社に祭り、それに、日本の代表である首相がそこに行って参拝を行う。こんなことまでして、いくら口では、日本は平和の道を選んだと叫んでも、どのようにして、外国から信用されるのでしょうか?

どの国でも、歴史上、当時の為政者が起こした過ちがあります。アメリカ、中国、韓国も決して例外ではありません。その過ちは恥だとしても、それを反省することは、決して恥ではありません。反省がなければ進歩もありません。日本では、よく「近隣諸国に配慮して」という決り文句が使われていますが、私は、それより以前に、この種の問題は、あなた達自分の国の重要な問題だと言いたくてしょうがありません。薬害エイズという事件はご存知でしょう。人の命の尊さを知らず、平気で医学実験の材料にしています。なぜこのことが起こったのでしょうか、あの血液製品を提供する緑十字という会社の歴代経営者、どうもそのルーツを辿れば、戦争当時、中国で人体実験を行った日本軍と何らかの関係があるようです。「731部隊」、「マルタ」、戦慄と恐怖を連想させるばかりのものです。しかし、戦後、アメリカは化学兵器開発に戦争時の日本の経験を利用したいというエゴのため、731部隊の責任者への追及を途中でやめてしまい、温存させてしまいました。当時の兵士は「731のことは絶対に言うな」と、戦後ずっと口を封じ込められていました。それとどこか似ているのは、エイズウイルスが混在されている血液製品のことをわかっていながら、平気で血友病患者に輸血しつづけて、日本人の命を奪ったことです。それは、平和時で日本の国内での出来事です。戦争のことを真剣に反省し、当時の責任者の責任追及さえ真剣に行っただのであれば、こんなことは本来防げるはずで、外国の感情を配慮する云々という前に、日本の国民のためにもっと真剣に考えてください。

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

戦争で命を失った人を悼むのはなぜ悪いのか？小泉首相はこのように問いながら、自分の正当性を主張しています。小泉首相よ、あなたは本当にわかっているのか、それとも自分にうそをついているのでしょうか？あなたが、沖縄や広島に戦没者や原爆の犠牲者に祀りに行くことは、だれも文句のいいようがありません。しかし、靖国神社には、強制的に戦場に送り込まれた兵士と彼らをそこに送り込んだ当時の軍部の責任者が共に祭られているのではないのでしょうか？こんな矛盾だらけなところは、明らかに戦争の真相と責任者の責任を隠蔽しようとしている場所です。首相はそこに参拝するのであれば、結局このような隠蔽に加担することであり、戦争で命を失った普通の人々の遺族には説明できないどころか、彼らを侮辱しているとさえいえると思います。それは、ハンセン病患者に対する謝罪で勇気を現した首相とは、明らかに矛盾しています。小泉首相は、自分の人気が高いからと思って、どうも高い声を出せば、何でも自分が思うままに通せると思い込んでいるようです。たとえそこに矛盾だらけであっても、「矛盾がない」と言い張る場面は、どうも滑稽としか思いません。

それにして、何で戦後半世紀以上も立った今、こんな問題でいちいち議論しなければならないのでしょうか？何で我々の世代まで、戦争の責任について議論しなければならないのでしょうか？戦争終結当時、すべてははっきりさせ清算を済むべき事だったのに。こんな偽善な態度をとる政治家には怒りをぶつけるしかないと思います。あなた達は日本をだめにしているのですよ！

(4) 並木隆史 (日本)

アンケートの対象にははおりませんが発言させて下さい。

中国や韓国の教科書で歴史がどう教えられているのか？

産経新聞が連載しています。

私にはずいぶん偏った教育に思えます。

むしろ日本の方が注文をつけるべきかと。

靖国神社参拝も教科書問題も日本人はどうしてことさらに「近隣諸国の国民感情を・・・」という発言、行動をとるのでしょ

うか？

それが国益を損なう行動です。

日本が気にするから向こうは騒ぎ出し、日本は騒がれたくないから及び腰になってお金を出すという、相手には失礼な解決方法をとることになってしまいます。

中国、韓国の足元に及ばずとも日本も少しは民族の自尊心を取り戻したいものです。

戦没者だけでなく東京大空襲でなくなった方を含めた慰霊碑をつくり米国をはじめとして外国の要人にもお参りしてもらえるようにしたいもの。(昨日小泉総理から国立戦没者墓地を検討してみたいという返答があったようですが)

英国のメモリアルデーに参列する英連邦諸国の代表はどんな気持ちで参列しているのかしら。

英国の外交スキルを日本も学びたいですね。

英国と日本とやったことは同じなのに。

勝てば官軍？

共同通信の記者が「三国人発言」という上げ足取りをしたことで中国人による犯罪が激増していることに対する都知事の危機感が都民に伝わらなかったのは残念です。

もし日本人による犯罪がある国で激増したら我々日本人、日本政府は、日本メディアは、どういう行動に出るのでしょうか？日本人の恥だ！！と自浄作用が働くのでは？

善良な中国人には迷惑な話ですよね。善良な中国人の手で何とかしてもらえないのでしょうか？

靖国よりチベットのジェノサイドが気になります。

(5) 匿名

小泉総理の靖国参拝問題についてまったく個人の考え方ですけれども、わたくしは学者で、世の中の政治に関しては全然興味のないものなのですが、政治家は政治家としての考え方がある

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

と思いますし、これに対して、よその国々がどうのこうのと指摘するのも、ちょっと余計なことではないかなーと思っています。政治の面での勉強が足りないです。勘弁してください。

(6) ヨサファット・テトオコ・スリ・スマンティヨ (インドネシア)

みんなで「靖国神社の参拝」を考えましょう！

靖国神社が「戦没者追悼の中心的施設」であるとよく耳にします。金沢大学で勉強をしたとき、日本政治史という授業を受けました。ちょうど現在話題になった「靖国神社参拝」も勉強しました。そのときあまり興味を持っていなかったのので、つい忘れちゃいました。しかし、この十年間に何回も日本の総理大臣が変わりました。日本の政治界のパターンを見ると、必ずこの「靖国神社参拝」が新総理大臣に直面的に質問されています。これが問題だったら、なぜ総理大臣を立候補する段階でこの問題が徹底的に処理されないか、ちょっと不思議に思っています。このことは、日本の方々が、もう既に靖国神社自体に興味を示していなくて、真剣にこの問題を考えていないという意味にもなると思います。

歴史を見ると、靖国神社は今から120年以上も前の明治2年に建てられた歴史のある神社「元東京招魂社」です。元々この神社を建てた目的は、国のために生命を捧げた人々、又は国のために力を尽くして亡くなった方々を祀るためでした。1945年に日本が太平洋戦争で負けてから、靖国神社の参拝が隣国に批判されてしまいました。なぜなら、アジア地域で戦った多くの日本軍指揮官がこの神社に祀られました。さらに彼らは戦犯と名づけられました。そのため、現在隣国は日本の総理大臣が靖国神社へ参拝するのも批判し、いつも騒いで話題になるのは無理もない。これからも何回、何十回、何百回も騒いで、繰り返すことになっていきます。これの解決がないか、よく問題になっています。歴史の問題だったら、歴史で解決すべきです。いまさら日本と隣国が「目には目で」ということをするのは、もう時代遅れです。昔日本が隣国をいじめたのは事実ですが、逆に現在日本が隣国にいじめられています。自由社会を尊重する

今の時代を見れば、これは皮肉な話だと思います。昔戦争があったから、現在の自由な世界が実現できました。時代も変わったし、みんなの力で考えて戦争の時代を終わらせて、平和な時代を必ず作ることができます。「敵づくりの時代から友達づくりの時代に変えよう！」と強い意思でみんなと一緒に考えなければならない。隣国から見れば靖国神社に祀られた人々は戦犯と思われるが、日本の立場から見ると彼らは英雄です。どこの国でもこんな考え方があります。このままずっと騒いだら、だんだん心の戦争になって、将来心理的な戦争になると心配しています。

この歴史的な問題は、教育と活発な情報交換で解決すべきです。日本と隣国の間に歴史に関する共同研究が行われるべきです。現在、確かに日本がアジア地域の最先端国になりました。様々な国レベルの科学技術財団が隣国と共同研究をしています。しかし、各分野の共同研究の割合を調べれば、自然科学に関する共同研究が圧倒的に多い。科学によって、より良い豊かな社会づくりというのは、とても良い目的だと思いますが、歴史的な研究まで忘れてしまったことに対しては遺憾に思っています。日本をまわったら、縄文時代や弥生時代や伝統的な作品などを展示する博物館が数多くあります。しかし、太平洋戦争に関する博物館が数少ない。逆にアジアの国々の博物館を見学すると、ほとんど太平洋戦争に関する博物館ばかりが目に入ります。たしかに、日本には戦争のことを忘れようと思っている方々が大勢いると思います。しかし、日本軍に精神的かつ肉体的に傷をつけられた隣国に暮らしている方々は、まだ大勢元気に暮らしています。これは良い機会だと思います。まだ生きている間に、みんなで新しい歴史を作ろう！

これから日本と隣国との間に共同で「歴史を考える会」を作って、冷静に意見を交わせながら、互いに立場を尊重しながら、時間をかけて歴史に関する本や情報の提供などを作成すれば良いと思います。よって、同時に新たな歴史づくりのきっかけにもなります。多少自分の立場を犠牲にすることもあると思いますが、近い将来「靖国神社参拝」のような問題が解決できると思います。特に、若い世代と子孫に正しい歴史が伝えられるのもよい教育の一つにもなります。戦争の時間は短かったが、これから友達としての長い時間を作りましょう。戦争で親友の気

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

持ちを犠牲にしないで!!!

(7) 葉 会 (中国)

アジア平和の聖域

靖国神社の公式参拝は敗戦処理への不服表示であり、既存国際秩序への挑戦である。国際社会の重要な一員として責任のある日本政府が決して為してはならない。

日本人の宗教観、伝統文化はどうかの言う前に、A級戦犯に象徴される日本軍国主義がアジアのヒトラーだ、アジアのナチスだ、巨悪だという歴史認識を確定しなければならない。これこそ日中、日韓乃至アジア諸国関係の基礎にほかならない。決して、日本一国の「ほとけ」の問題ではない。

「哀悼」、「感謝」、「尊敬」という率直の気持ちも率直さに欠ける。大日本帝国軍人の犠牲のおかげで日本国の今日の繁栄と平和がもたらされているという発想が可笑しい。「哀悼」、「感謝」、「尊敬」の気持ちを、アメリカをはじめとする同盟国軍の兵士、中国や韓国などアジア諸国の戦士たちに捧げるべきではないか。彼らの尊い命の犠牲がなければ、今日の日本国はあるはずがない。

民族主義の高揚が極めて危険だ。政権の支持率が高いほどそれが危惧される。一国の指導者としては時勢に流されないように冷静な判断が要求される。「靖国」の国は大日本帝国のことで、東条英機らかつての指導者が憎むべき平和への、人道への戦争犯罪者であることを日本人の良識と自覚で認識してほしい。

確かに、長引いた不況に悩まされてきた日本国民の期待を一身に背負っている小泉さんが聖域なき構造改革を決行しなければならない。でも、靖国神社を公式参拝してまで、日本国の救世主を扮する必要はない。

「靖国」は救国の道ではない。公式参拝は匹夫の勇に過ぎず、日本国首相として決して踏み込むべきではない聖域なのである。

(8) 林 泉忠 (中国／香港)

「靖国参拝問題」は「歴史的連続性」問題の一環

結論から申し上げますと、小泉総理の靖国神社参拝問題に関して、私には即効がありそうな処方箋はありません。

そもそも、この問題は単に独立した問題というよりも、戦後日本政治の構造的な問題の一環と捉えればよいでしょう。この構造的な問題の核心は、戦前と戦後の歴史の連続性であると言えるでしょう。そしてこの連続性を集中的に身に付けたのは、戦後日本の政治を率いてきた自民党の体質そのものといわざるを得ません。ちなみに、この連続性は、戦前の日本に似ていた、戦後のドイツには顕著に見られません。確かに、この連続性を存続させた責任は、パワー・ポリティクスを背景として、日本の戦後体制を建てたマッカーサーに率いられた占領軍にもありますが、「過去」との完全な決別をめぐって自己再生の能力を「先天的に」欠けている自民党に代表された保守勢力にも、そしてこの自民党を支持してきた日本の国民にもあるといわざるを得ないのではないのでしょうか。

強調することもなく、この戦後日本政治の構造的な問題の核心である、「解決不可能」な「歴史的連続性」問題は、戦後の日本とアジア関係に困難をもたらしたのみならず、日本が「普通の国」になることを難しくさせてきたのでもあります。言い換えれば、戦後日本の再生に貢献してきた自民党自身は「自己再生」の能力が身に付けない限り、「靖国神社参拝問題」に象徴される「歴史的連続性」の問題は解決できないでしょう。

(9) 葉 文昌 (台湾)

戦犯は全体の少数です。

そして彼らはすでに戦後に処罰を受けています。

靖国神社に祭られる人間は、正しいと思って、国のために自分の生命を犠牲した人間が大半を占めています。先祖に対し敬意を持つことは、どこの国でも共通で、小泉総理も戦犯を祭るために行くのではなく、国のために正しいと思って戦った人を祭

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

るために行くのだと思います。日本としては近隣諸国に対して、迷惑を掛けたことは認めており、だからといって国のために犠牲となった先祖までも無視させるのはおかしいと思います。

日本には今、自分の国に対する誇りや愛国心が必要です。これは右傾化ととらえられますが、実際には米国や近隣諸国のそれと比べると、ぜんぜん右傾化と言えません。台湾では忠君愛国は当たり前と教育されています(今では忠君を国に忠すると解釈されています。) 忠孝仁愛の順番からわかるように忠は孝より重んじられています。国が滅びれば、他も成り立たないからです。

日本の軍国主義台頭の危惧については、全くその心配はないと思います。これは日本が民主国家であるからです。日本に留学したことがある人間なら、日本から戦争を仕掛けることはありえないことはわかると思います。また戦後から今まで、民主国家が仕掛ける戦争は一件もありません。すべてが、独裁国家が仕掛ける戦争です。

(10) 南 基正 (韓国)

靖国神社の件ですが、日本が「内向き」になっていく状況は、
1、長期にわたる経済低迷
2、それより長期にわたる政治の形骸化が背景になっており、これに付け加えて、私の言葉でいえば、すでに「ドグマ」と化してしまった「戦後平和主義」の更なる「ドグマ」化＝「剥製化」に問題があるように思えます。ところが、驚異的な「国民的」支持率に支えられている小泉さんがまたも従来のように、「中国と韓国に配慮し、公式参拝を見送った」ということになると、いわゆる「国民」のストレスがまた高まり、それと同時に中国と韓国への嫌悪感も高まり、結局は「つくる会」の立場を強化することになってしまうことが、もっとも懸念されているところだと思います。だからといって、何もしないで「容認」してしまうこともできません。

「戦後平和主義」の再生・再構築という課題は、もっとも重要ではありますが、時間のかかることでありますので、今は、そんなのきなことをいっていてもしようがありませんし、困っ

たことです。動いても動かなくても、「つくる会」などの「強行突破」論者の思惑通りになってしまいます。どちらでも同じなので、やっぱり、動かなければいけない、という結論になってしまいます。では「何」をすべきでしょうか。

さて、ここまで書いて、行き詰まってしまいました。その「何」が浮かんでできません。「想像力」の貧困でしょうか。とにかく、今回の問題は、従来の「靖国参拝問題」より複雑多層な問題のように思えます。もう少しだけじっくり考えさせてください。

(11) 鄭 成春 (韓国)

対立から協力へ

小泉首相の靖国神社参拝問題をめぐって近隣諸国から敏感な反応が出ています。私は歴史問題に詳しいわけではありませんが、私が来日して以来、この問題をめぐって、ほぼ毎年、日本と近隣諸国との対立が続いてきたことに気づきました。ここ何年ではなく、実は、この問題は戦後ずっと日本を苦しめてきた問題でもあるでしょう。

なぜ、過去の問題をめぐって半世紀にわたる対立が続いてきたのでしょうか。とても不思議です。日本人はもううんざりしているし、近隣諸国も日本の態度にまたうんざりしています。もう相手にしたくないと思うほど、人々は感情的に対立しているわけです。

小泉首相の靖国神社参拝宣言は、激しく燃える火に油を注ぐようなものでしょう。それは当然のことで、一国の首相の行動は、個人の行動ではなく、国の方針を代表するものになるからです。首相個人がいくら個人の問題だと主張しても、近隣諸国はそれを国の方針として受け止めるわけです。それゆえ、首相の参拝は近隣諸国を強く刺激していると思います。

ここで、原点に戻ってもう一度考えてみなければならぬことがあります。靖国参拝はなぜ近隣諸国を刺激するのかという問題です。「国のために」命を落とした人たちを参拝することが

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

なぜ悪いでしょうか。日本人の多くはそう思うはずです。実際、韓国人も戦争で命を落とした人たちを慰めるために、国立墓地をつくったのです。そこに、政治指導者は毎年参拝をしているわけです。靖国神社参拝も韓国の国立墓地参拝も実は同じことなのではないかと思えます。良かれ悪しかれ、不幸な戦争で命を落とした人たちは自分達の子孫から慰めを受ける権利を当然有するわけで、それはそもそも非難の対象ではないと思えます。

それでは、なぜ近隣諸国は靖国神社参拝にあれほど敏感なのでしょう。その根本的な理由は、いわゆる過去の歴史問題がまだ片付けられていないからだと思えます。つまり、自分達は悪いことをしていない、逆に被害者だという被害意識はあるものの、近隣諸国に被害を与えたという加害意識は非常に薄く、その結果、近隣諸国の被害者達には非常に冷たい態度を見せてきたことが根本的な原因であったと思えます。

このような被害意識（歴史認識）は、当然教科書にも反映されるわけで、それがまた教科書問題を引き起こしています。様々な問題の根っこは一つです。それはきちんとした過去清算の欠如です。

日本人はみんな過去は清算したと思うかもしれませんが。韓国との関係からいえば、日本は1960年代の初頭に日韓関係を正常化するに際して、きちんとお金を払ったよと、日本人は考えるかもしれませんが。しかし、それだけでは片付けられない問題が社会の様々な分野に山積しているのではないのでしょうか。教科書問題、従軍慰安婦問題、在日韓国人の法的地位の問題などいろんな問題が残っており、きちんとした処理がなされていないのが現状ではありませんか。首相個人の参拝問題は、個人の問題としては結構ですが、その問題が上で挙げたような過去清算の問題と絡んでいるから、近隣諸国は敏感に反応していると思われまます。

近隣諸国が日本人を見る視点には問題がないのでしょうか。私は近隣諸国にもいろんな問題があると思えます。まず、日本人は加害者であると同時に、戦争の被害者であることを認める必要があると思えます。つまり、日本人は戦争が好きで戦争をやったわけではなく、多くの日本人は時代の大きなうねりに巻き込

まれて、やむを得ず戦場に行かざるを得ない場合が多くあったのではないのでしょうか。馬鹿な戦争だと思っても、権力者の強制、世間の目、共同体の中での立場等、様々な要因によって戦場に引きずられたのが実態だったのではないのでしょうか。そのように戦場に行き、そこで死んだ日本人は数多くあったでしょう。その死者たちのために、子孫達は、いつまでも慰めの参拝を行いたいと思うわけで、このような感情は極めて自然なものであり、それを非難することはそもそもできないと思えます。しかし、近隣諸国の国民は、このように多くの日本人が被った被害についてはあまり考えないのです。自分が被害者だという考え方が優先し、多くの日本人の被害については目をつぶり、小さいことに対しても感情的に反応するわけです。このような状態では、出口は見えないのではないのでしょうか。

この状況で、一体どこから出口を見つけ出さなければならないのでしょうか。私は日本が率先を見せることが必要であると思えます。なぜなら、これらの問題の解決に日本の責任がより大きいからです。また、それほど社会が成熟しているからです。これまで、裁判所で戦ってきた多くの慰安婦達や労働者に対して、思いやりのある対策を立てること、その前提条件として、日本政府と韓国政府、あるいは、日本政府と中国政府といった、日本政府が中心になる国際的過去清算委員会を大々的に設置し、その委員会が過去に何があったか、それに現在かかわっている人たちは誰なのか、その人たちは今何を求めているのか、その問題を解決するためにどうすればいいのか、これらの問題に対して誰が責任を持つべきか、といった問題に真剣に取り組むべきであると思えます。また、委員会の活動、そこで明らかになった事実や情報はすべて広く公開し、国民の教育のために活用すべきなのではないのでしょうか。

「国は過ちを犯さない」といった神話はもうあきらめてほしいのです。韓国や他の近隣諸国の弱者に対して、日本政府、裁判所はこれまで冷たい態度しか見せてきませんでした。しかし、不思議なのは、アメリカのような大国に対しては、日本の立場をきちんとさえ、どの場面でもアメリカ追従主義という二律背反的な態度を見せてきました。「弱者には強く、強者には弱く」、それがこれまで日本政府が見せてきた、過ちを犯さない国の姿でした。このままでいいのでしょうか。このような態度

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

を見る近隣諸国の国民は、日本政府を、いやひいては日本国民を、きつと卑怯者と思うでしょう。強い国、指導的国になるためには、逆に、「強いものには強く、弱いものには哀れみ深く」といった、国の政策転換が求められていると思います。また、近隣諸国は、日本人の多くが実は被害者であったことを認め、その上で、被害者同士が過去の痛みを如何に直していくかについてより協力的な姿勢をとることが望ましいのではないのでしょうか。

私は、このことを実現できる政治体制が早く構築されることを待ち望んでいます。いくら理念がすばらしいものであっても、その理念の実現には政治的な力が必要だからです。その力を持つ主体は一体誰でしょうか。小泉首相にそのような力があるのでしょうか。政治はショーではありません。政党に対する支持率は視聴率とは違うのです。まるで、テレビ番組の視聴率のようにになっている政党支持率に私はあまり期待しません。興味本位の政治はいずれ破局を迎えるでしょう。国内問題だけでなく、国際問題、それも弱い立場にある近隣諸国の人々に哀れみを示さない政治は、「政党視聴率」がいくら高くても、真の意味の支持を受けているとはとてもいいがたいのです。

より広くより長く社会を観察し、強いものにはより強く、弱いものには哀れみ深い、また、悪者にはきちんと責任を問う、そのような強力な指導者、政治体制が、むちゃくちゃになっている過去清算問題を解決する上で最も重要な鍵なのです。したがって、過去清算をめぐる国際問題は、実は、日本の国内問題でもあります。また、過去清算問題の解決度は、日本政治の、日本国民の成熟度を表す試金石なのではないのでしょうか。より成熟した日本政治と国民意識を待ち望んでいます。

(12) 吳 東鎬 (中国)

①首相の主張：「戦争を美化したり、正当化する気持ちは全くない。二度と戦争を起こしてはならないという気持ちから、戦没者に哀悼の気持ちをささげたいという考えだ。靖国参拝と日中友好は矛盾しない」

検討：私は、首相のこの主張は、単純な「動機論」「感情論」であり、そもそも歴史問題にもならないと思います。たぶんこの言葉自体を否定する人は(良識ある中国人を含めて)誰一人でもないでしょう。だから、90%の日本国民の支持を得ていることは当たり前で、そんなに驚くべき問題ではないと思います。

②中国政府の観点：「靖国神社は日本の近代史における対外侵略の象徴であり、現在もA級戦犯が合祀されている。日本が靖国神社参拝問題にどのように対処するかは、単に日本の国内問題であるだけではなく、日本政府が過去の侵略の歴史にどのような態度を取るかを検証する試金石であり、同時に中国をはじめ、戦争の被害を受けた国の広範な人民の感情に直接かかわるものである。」

検討：この主張とは、小泉総理の視点と全く違う観点で、いわゆる「効果論」「結果論」ともいえるでしょう。つまり、靖国神社は単なる普通の神社ではなく、独特の歴史背景と歴史事実を持った、戦争の象徴たるものであったという歴史的、政治的の重さを強調したということです。歴史上、神道が国教とされ、軍の管轄において特別の扱いを受けてきた靖国神社は、軍国主義の世の中で、人々の心理的な支えになったことは誰でも否定できないでしょう。それでは、戦後、靖国神社の位置付け、役割はどうなっていたのでしょうか？日本政府が積極的に靖国神社を戦没者を祈念し、その戦争に対して反省する国民的場として作ろうと努力したのでしょうか？

今日、日本の一般国民として、靖国神社に向かったとき、本当に純粋な戦没者に対する哀悼と戦争に対する反省の気持ちが湧いてくるのでしょうか？疑問が残ります。戦後、確かに軍国主義精神は全面的に否定され、靖国神社も形だけではただの普通の神社になっていたが、実際にもそうになっていたかは疑問があります。私は、むしろその反対の方向へ行ってしまったのではないかと思います。特に、右翼勢力が靖国神社へ手を突っ込んでからは、日本国民から段々離れてしまい、むしろ軍国主義が生き残る場になってしまったのではないかと思います。だから、日本の政治指導者があそこを参拝すること自体は、その人がどんな動機を持っているかには係わらず、一つの客観的効果として、「軍国主義精神」を主張する右翼勢力の助長となり、更に

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

は、将来日本政府の歴史観の構築にも影響が出てしまうのではないかと、中国側が懸念するのも一理があると思います。一言で言えば、結果として、(外国から見た場合)日本政府の「軍国主義」支持の一面がでてしまうということだと思います。だから、靖国問題の本質は、事実上「靖国神社」が軍国主義と完全に離れて純粋な国民的場になっているかどうかにあると思います。

以上、両方面の主張を比較した場合、両者は全く違う視点からの主張であり、そもそも正面からぶつかっていないでしょう。そのままの意見交換になったら、永遠に問題解決ができないと思います。だから、焦点を絞ってもっと正面から議論を展開すべきだと思います。

解決策： 戦没者と靖国神社とのかかわりを切って、アメリカのような民主的色彩の透明な戦没者公園を作るべきでは。

③憲法論としての問題点：小泉首相の靖国神社参拝は、政教分離原則の違反である。つまり、首相の靖国という特定宗教法人を参拝することによって、客観事実上国と特定宗教の係わり合いになり、民主国家の基本となる価値多元主義社会原則を破壊することになる。

(13) ブレンサイン (中国/内モンゴル)

靖国神社参拝は日本の国内問題だと思います。

日本人にも日本人としての立場がある。親が悪いことをしたからと言って、その親の子供たちにとっては育ててくれた大切な親であるには変わらない。だからお盆ぐらいその親の墓に参拝してもいいだろうと思う。

近隣諸国の感情を考慮する必要はあるが、しかし多極化した国際社会のなかで今日本は自己確立を求めている最中にある。右翼化傾向にあるというのも立場を変えればこのように解釈する事ができよう。

要は、最近議論になっているように、誰でも気軽に参拝出来る日本の国立墓地を早急に設立し、靖国神社の存在を薄くしてお

く必要がある。こうして戦後処理のしがらみを一つ一つなくしていくことが、結局日本の自分探しにつながるのではないと思う。

つまり戦前の問題をいつまでも政治のカードに使おうとする日本の少数の右翼と近隣諸国の無責任な政治家たちに事柄を与えないで済む。

(14) 高 熙卓 (韓国)

「靖国問題」への大局的な解決策を！

小泉首相は、「8月15日に靖国神社に公人として参拝する」と繰り返し明言している。内外の強い反発をものともしない明言振りにもそうだが、それに対する日本人の高い支持率には本当に驚かされたものだ。「国のため命を捧げた人々に敬意を表し、その冥福を祈る」ことにまで外から干渉されてきたと思う人々にとっては、小泉首相の「日本人としての当然のこと」といった確信的主張に共感を覚えたことだろう。その共感の気持ちはまったく理解できないものではない。とはいえ、これまで「靖国問題」が大きな政治・外交問題になってきたことも無視されてはならないのではないだろうか。昔から、「人と人の間は、疑いをもって離れ、信をもって合す」といわれる。国と国の間も然り。事態の展開によっては、これまで日本とアジア諸国との間で築かれてきた相互信頼への土台に大きな亀裂をもたらす危険性さえないとはいえない。「靖国問題」にかけられている「疑い」を晴らすことへの配慮も欠かせない所以である。

もちろん、首相自身は靖国参拝が「日本国民の平和や戦争防止への基本的意思と相反することではない」と理解を求めている。しかし、意識的であるにせよ無意識的であるにせよ、首相の今の姿勢は従来の靖国参拝か否かといった二者択一論的視点がある意味では徹底化するものであって、その視点のままでは問題は解決できず、むしろ靖国参拝への穏当な理解さえも得られないはずがない。それどころか、その視点が、一方の満足は他方の不満を伴うといったゼロサムゲームのような構造をもっているため、その問題をめぐる葛藤は一層複雑になっていく恐れさえ

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

ある。国民的に人気の高い小泉政権だからこそ、その葛藤は余計にナショナリズム的葛藤のように描かれやすい。それだけに、こうしたナショナリズム的葛藤を生みやすい二者択一論的な構造を解体し、小泉首相の明言に対して支持する人々も、強い懸念をもっている人々も、互いに納得し歩みよることのできる地平はつよく求められている。はたしてその地平はどのようにして開かれるものだろうか。

1978年以來「A級戦犯」とされた戦争の主導者が戦争の犠牲者といえる多くの戦死者と合祀されていることによって「靖国問題」が生じられたということはよく知られている。といっても、戦没者慰霊において主導者が犠牲者かを区別すべきではなく、その意味で靖国参拝がそのまま戦争の肯定や美化にならないといわれるかもしれない。しかし、問題はそれだけではない。靖国には、とくに女性、老人、子供などの戦争犠牲の象徴である犠牲者が祀られていない。「平和や戦争防止」と両立する戦没者への慰霊を掲げながら、日本政府の代表が「公人として」参拝するには靖国はあまりにも代表性に乏しく一方に偏っているのではないか。この意味でも、「靖国問題」は単にナショナリズム的葛藤のみ還元できない性格をもっている。

そのみならず、国をあげてたたえようとしている「靖国英霊」の戦死の実態に対しても目を逸らしてはならない。最近、太平洋戦争における日本軍の軍人・軍属戦死者のなかで、死因は6割が餓死と栄養失調だという衝撃的な結果が藤原彰氏の10年がかりの研究でまとめられた(『餓死した英霊たち』青木書店、2001年5月)。その老学者の「<靖国英霊>の過半数は飢餓地獄の中での野垂れ死にだった」という言葉によっても明らかであるように、名誉戦死の名に隠された「戦死の実態」はじつに暗くて重い。それにもかかわらず、首相自身が公然と「特攻隊」を潔い犠牲の典型としてたたえることは、それが自己規律の指導者倫理を首相自身に課したようなものであったとしても、こうした戦争犠牲の影のところが隠蔽し、現実の生から離れた「死の美学」のようなものを、とくに若い人々に植え付けることにはならないだろうか。しかもそれによって、あらゆる戦争犠牲に対して、小泉首相の靖国参拝はまるで序列を与えて区別するようなものになりはしないだろうか。

それが顧慮されて、千鳥ヶ淵墓苑を国立墓地にしようとする案も出されたことだろうが、それもまた軍人中心か民間人中心かといった二者択一的な議論になりやすい。そのためにも、軍・民を問わず、ひとつの場所ですべての戦争犠牲者を祀ることのできる「国立墓地」を新たに造成することはどうだろうか。モデルとしては沖縄にある平和の礎を参考にしながら、靖国と千鳥ヶ淵を合わせた形の墓地にすることも可能だろう。公式参拝地がそのような新しい「国立墓地」に替わることによって、一方では、軍国主義風の靖国にまつわる内外の憂慮も払拭できるし、他方では、「日本人としての当然のこと」としての慰霊・追悼がより全国的にスムーズに行えることだろう。しかも、そのような軍民共同の「国立墓地」造成は、戦争犠牲を誇りに思う遺族においても戦争犠牲者における女性、老人、子供などの存在の意味を新たに吟味させる教育の現場にもなるだろうし、また内向きの靖国よりは外国の外交使節や一般の人々も参拝できるような開かれた慰霊の場所にもなることだろう。

それにしても、「平和や戦争防止」の志向を信じさせるためにも、日本軍によって多くの犠牲を被ったアジア諸国の戦没者への慰霊は欠かせない。吉田秀和氏のいうように、「まず隣人たちの国の犠牲者を丁重に弔ってくる」(朝日6月22日夕刊)といった旅を实践してみてもどうであろうか。「懺悔と和解のための共同慰霊の旅」と名づけて首相自らアジア諸国を廻ることだ。その旅が実現できれば、戦争などで苦しんできた数多くの人々の心だけではなく、世界の多くの人々にもきっと何か響くものをもたらすことだろう。ハンセン病患者に涙したような共感力と責任感の持ち主だからこそできるような事柄かもしれない。ぜひそれを日本国内に閉じ込めず日本の外に向けても広げていただきたい。できれば来年8月15日に合わせて軍民共同の「国立墓地」を完成させ、そこにアジア諸国の指導者や遺族関係者などを招待して共同慰霊の記念行事を行う。それとともに、それを前後にしてアジア諸国への「懺悔と和解のための共同慰霊の旅」を実行する。こうした感動の波が広がるにつれて、さまざまな「歴史問題」への見解の差にもかかわらず、アジアにおける日本のリーダーシップへの期待と信頼は一層深まるに違いない。

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

(付録1) 船橋洋一講演会メモ

日時：2001年6月27日(水)

場所：商工会館

主催：Columbia University Alumni Association of Japan

講師：朝日新聞コラムニスト 船橋洋一氏

演題：Coming to Terms with the Past: Japan's Foreign Policy

(注：come to terms withは、受け入れたくないものに屈服する、甘んじる)

使用言語：英語

船橋さんは教科書問題と靖国参拝問題を中心に、例によって非常にわかりやすく説明されました。

以下は、私の印象に残った事柄です。

- 冷戦が終わってから、世界中の指導者が過去を謝罪するようになった。一方、民主化が進むにつれ、それまでは上から押さえつけられていた歴史問題や民族問題がふきだしてきた。従って、この傾向はさらに強まっていくだろう。
- 歴史問題は、日本だけの問題と考えるべきではない。しかも国家や民族の根幹にかかわることなので、軽視してはいけない。多文化主義・多民族主義が広まっていく反作用として、必ず繰り返す生じる問題だろう。民族や国家が侵害された過去の戦争への謝罪要求は、いつまでたっても終わることはないだろう。
- 日本特有といえる歴史観もある。①広島と長崎のため、直感的に日本は戦争の犠牲者だと考える。②終戦時、政治的・軍事的指導者達は、欧米主導の国際的取り決めを不公平であると考えた。民主主義国家に囲まれたドイツと違い、当時の日本は民主的な取り決めについて「対話」できる隣国がなかった。③アメリカの判断で、天皇の責任問題があいまいにされ、国民の統合の象徴となったことで国内での責任問題は長い間見過ごされることになった。今年のピューリッツァー賞のH. ビックスの作品は、昭和天皇をひとりの人間として検証したもののだが、来年翻訳されて講談社から出版されれば大きな話題となるだろう。
- (結論として) 日本政府は歴史問題についての考え方を明瞭に表現しなければならない。今まで、あまりにも長い間取り組みを避けてきてしまった。一般市民も含めた歴史的和解のための総理大臣直属の諮問機関を設けるべきだろう。

<質疑応答の中で>

- 現在、日本人の90%は、総理の靖国参拝を支持している。近隣諸国が批判すればするほど、この支持率は上がるだろう。それほど、日本人は、近隣諸国からの「teaching」にうんざりしてしまっている。
 - 戦犯との合祀は、勿論日本人の遺族の中にも反対者がいるが、それよりもっと多くの遺族は、とにかくあの場所に安らかに眠らせてあげたいと思っているだろう。
 - 民間の和解例として強制連行された労働者が蜂起した花岡事件があるが、鹿島の決断は Gracious だが、その後の訴訟を止められなかった。(被害者の一部がアメリカで起訴)
 - (フロアーの意見) 教科書問題について韓国からの修正申し入れは、人道的見地もあるが、歴史問題の解決にむかう良い契機として戦略的に利用すべきなのではないか。←(船橋氏の意見) 日韓の関係は非常に変わってきており、教科書問題も比較的冷静に受け止められたと思う。
 - (フロアーの欧米人からの意見) 一体この地域(アジア)は、どうしていきたいのかを決めなければいけないのではないか。←(船橋氏の意見) 地域内での経済的・軍事的な協力体制をつくりあげていかなければならないでしょう。
- 以上

(付録2) 北京レポート

曾 支農

問題の肝心は歴史認識にあるのではないか

1、靖国神社参拝と平和・反戦談話との矛盾

7月4日夕方5時5分、筆者が乗っている成田空港発、北京行きのUA853便飛行機が、悠々と大空を飛んで行く。中国社会科学院「日本軍国主義史」研究(同院の重点的研究プロジェクトでその傘下にある日本研究所・世界史研究所・世界経済与政治研究所の専門家による共同研究である)課題組の主催で、北京にある「平和飯店」において開かれる「近代日本の内外政策」という国際シンポジウム(7月8日~10日、中・日・韓国・朝鮮4ヶ国の歴史学者の集まり)に出席するため、北京に向かう途中であった。

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

スチュワードから配られた某日本新聞紙に目を通したら、ある短い記事に気がついた。「終戦日での小泉首相の靖国神社公式参拝に対する近隣諸国の抗議殺到を予想して、その反発情緒を和らげるため、政府関係部門は、靖国神社公式参拝の時に平和・反戦を宗旨とした談話を発表することを首相に提案したいと、現在検討中である」との内容であった。結局、小泉首相がこのような提案を受け入れたかどうかは分からないが、このように対処すれば、果たして所謂「靖国神社参拝問題」を簡単に解決することができるかとも言うのだろうか、と疑問を禁じ得ない。なぜかという、言うまでもなく、「問題」となっているのは、参拝時にどういった内容の談話を発表するのにはさておいて、近隣諸国がまず、日本の指導者による靖国神社の公式参拝の行動自体を強く反対している点であり、これは一つの談話で簡単に「誤解」を取り消せるものではないからである。

国内外の強い反発を押し切って靖国神社の公式参拝を断行すれば、幾ら「平和」・「反戦」の談話を発表したとしてもその真意が疑われるのは当然の結果であろう。中国政府は既に5月から一貫して「日本は新内閣発足後、過去の侵略の歴史を承認、反省する立場を堅持すると何度も表明し、国際的協力を強化し、隣国との関係を発展することを強調してきた。しかし最近の日本側の靖国神社参拝問題での一連の発言は、これまでの表明してきた態度とかけ離れたもの」であるため、「日本の国際イメージをさらに悪化させ、歴史認識問題におけるアジアの信用を再び失うことになるだろう」と指摘してきたからである。

一方で、本当に「平和」・「反戦」の意を唱えようとするなら、態々参拝の場所で談話を発表するのではなく、まず国内外の猛反発を引き起こしやすい参拝行動を中止した方が賢明ではないかと思われる。要するに、首相の靖国神社公式参拝と平和・反戦談話との間には、ある意味で実に矛盾している部分があるということは周知の事実だと言わざるを得ない。

本来、首相による靖国神社の公式参拝自体は「問題」である、と認識・予測しているのならば、政府としては、それを止めさせるべきであり、ただ相手側の反発情緒を何とかして和らげることに「工夫」するだけでは、相手の反発意思を抑えることができるはずはない、と思われる。

上述の問題点を考えながら、出発直前に受け取った、関口グローバル研究会の今西代表から会員の皆さんに発信した船橋洋一氏による関係講演のメモの内容を思い出した。即ち、現在、

日本人の90%は、首相の靖国神社の公式参拝を支持しており、しかも近隣諸国が批判すればするほど、この支持率は上がるだろうと推測し、その理由としては、近隣諸国からの「teaching」に日本人がうんざりしてしまっていると解釈していることである。

90%の支持率説の由来についてまだ本人に確認をしておらず、冒頭の国際シンポジウムにおいて氏のお名前を出さずにその「説」だけを紹介したところ、朝鮮の学者はまずそれを疑問視し、その根拠はどこにあるかと質問し、中国の学者はさらに「日本側の右翼的な勢力を過大視してはならない」という忠告を出し、ある日本側の出席者は「これは嘘だ」と断言していた。皆、過半数以上の日本国民による小泉首相の靖国神社公式参拝への支持態度(もしこれは事実であれば)を信じたくはないらしい。

ところで、誰が信じるかどうかではなく、もし船橋洋一氏の分析が事実に基いた話であれば、「靖国神社参拝」に対する日本国内外の認識には、天と地の差が既存しているのをまず念頭におかなければいけないと考える。

さて、「靖国神社参拝」への認識は、日本国内外では一体どう違うのかに関して、中国を例として簡単にまとめておこう。

2、日中における「靖国神社参拝問題」の交錯

今回の一時帰国は、北京での国際シンポジウムへの出席以外に、母校である武漢・華中師範大学に「兼任教授」と招聘されたことに対するお礼や、父の看病のための実家(荊門)帰省などを兼ねた旅であったために、北京・武漢・荊門それぞれの大・中・小規模三都市に短く逗留でき、歴史学者以外に、昔の同僚である現役官僚や、新聞記者および様々な分野で働いている友人達と話し合う機会を得た。至る所で、中国では、小泉首相の靖国神社への公式参拝意思表示に対して官・民(特に学者)共に理解できない、また、特に侵略戦争の被害国であった中・韓をはじめ近隣諸国の参拝中止要求を無視してきた氏の「傲慢」な態度に怒りを覚えている、という不満が広がっていると感じられた。

なぜ中国では日本の指導者による靖国神社の公式参拝が強く反対されるのかということ、下記のような認識によるものからだと考えられる。

まず、靖国神社の性格や役割は「国の為に身を捧げた戦士を祭るところであり、参拝は戦没者への敬意・謝意・悼意を表したい

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

ものだ」という日本側の認識・解釈に対して「靖国神社は日本近代史上、対外侵略と拡張の象徴であり、現在もA級戦犯の位牌が祭られているところでもある」、というふうに認識されていることである（「靖国神社象徴論」）。

次に、上述の認識を踏まえ、中国では、所謂「靖国神社問題」の本質を二つの側面から捉えている。一方としては、靖国神社参拝は日本の国内問題に留まらず、中国を含む多くの戦争被害国の国民感情に影響を与える問題（「国民感情傷害論」）であり、もう一方としては、日本政府と日本の指導者が過去の侵略の歴史をどのようにとらえているのか、という問題（「歴史認識不足論」）である。

第三、「内政干渉」という一部の日本人の言い方に対して、「日本軍国主義が発動した侵略戦争の最大の被害国として、中国がいかなる形であれ日本政府指導者の靖国神社参拝に反対するのは当然のことである」、と主張している。

第四、日本は新内閣発足後、過去の侵略の歴史を承認、反省する立場を堅持すると何度も表明したことと、首相の靖国神社正式参拝の発言とは矛盾しているのではないかと、といった日本政府や日本指導者の言動への不信感・不満（「政府言動矛盾論」）である。

以上の「四論」（「靖国神社象徴論」、「国民感情傷害論」、「歴史認識不足論」、「政府言動矛盾論」）とは、筆者の大雑把な論であり、必ずしも精密な検証を基にした説ではないが、中国側の反発の根拠になるものであるのは間違いと断言できる。更に細かく分析すると、言うまでもなく「四論」の肝心は、「靖国神社象徴論」（以下に「象徴論」と略称）にあるといえ、他の「三論」はここから派生したものであろう。

ところで、問題の焦点になる「象徴論」に対する日中両国の認識は、かなり違うといえる。戦争の最大被害国である中国では、「靖国神社には一般戦没者のみではなく、東京裁判でA級戦犯と断罪された侵略戦争を引き起こした戦争指導者達の位牌も祭られているので、現政府の指導者による靖国神社への参拝自体こそが問題となる。即ち、明言していないが、参拝という行動自体によるA級戦犯への敬意・謝意・悼意の表明は、反省どころか、（日本軍国主義に対する一種の）屍を借りて魂を呼び返す意図の現われではないか」と強い警戒心を持っており、小泉首相は一体誰に「敬意・謝意・悼意を表したいのか」と疑問視している。こうした認識を基に、日本政府指導者の「靖国神社参拝」

は、「反省表明と矛盾し、侵略歴史への認識不足を表し、戦争被害国の国民感情に傷をつけた行動である」と位置づけ・強く批判し、被害国として、こうした「参拝」行為への批判の権利を有しているのも当然であると主張してきた。

上述の批判に対して、日本側の一部分の人は「靖国神社に祭られているのは国の為に身を捧げた民族の英雄であり、国の首相としてそれを参拝するのは当然のことであるために、他国による批判は内政干渉だ」と言い返している。そういった考えを持つ人々は、所謂「大東亜戦争自衛論」、「戦犯認定国際法違反論」（「東京裁判否定論」）に由来するものであり、詳細は紙面の幅のため、省略する）などの説に賛同的な態度をとっているか、或いは戦争の真の歴史をまだ知らないかのどちらかにあるのではないかと思われる。もしそうであれば、「靖国神社参拝問題」とほぼセットになっている所謂「歴史教科書問題」のことを想起されたい。

3、歴史認識に問題があったのではないかと

所謂「歴史教科書問題」とは、簡単に言えば、如何に歴史事実や歴史認識を盛り込んだ歴史の教科書を編纂し、これを基に未来を担う子供達に正しい歴史教育を実施するのかという問題であり、「靖国神社参拝問題」と同様に、しばしば、日本と近隣諸国との間で論争を引き起こす材料の一つとなっており、今年も「新しい歴史教科書をつくる会」による歴史教科書の「検定合格」や、日本政府の中国・韓国両政府による「史実を歪曲し、侵略戦争・植民行為を美化する表現を再修訂」する再三の要求を事実上拒否したために中・韓両国の猛反発を受けている。

ここでいう「侵略戦争を美化する」という指摘と、「靖国神社参拝問題」に必ず出てくる「侵略戦争を引き起こした戦犯への参拝は侵略戦争を正当化しようとしているのではないか」という指摘とが、同じ視点から問題を提起しているのは明らかである。即ち、日本としては、過去の歴史を如何に認識しているのかという問題であろう。要するに、戦後半世紀を経ても依然として世を騒がせる「歴史教科書問題」にせよ、「靖国神社参拝問題」にせよ、突然起きた個々の事件や問題ではなく、何れにしても戦前の歴史と関連して、日本の「歴史認識問題」（戦争は侵略であったか自衛であったか、東京裁判は正当であったか不法であったか、A級戦犯を裁いたのは正義なる行為であったか単なる

あなたは小泉総理大臣の靖国神社参拝をどう思いますか

勝者による敗者への懲罰であったか等等)に答えを求めるべきだと考える。

「靖国神社参拝問題」の解決策として、中国の元指導者であった故鄧小平や胡耀邦などは「A級戦犯の位牌を靖国神社から別のところに移したら如何だろうか」と日本側に提案したことがあり、日本国内においてもこの提案に賛同する形で「分祀」を主張する人もいれば、「国立墓地」を建設しようという声もあった。「靖国神社参拝問題」は確かに一つの政治問題・外交問題として、日本の国際イメージに影響をもたらしているのみではなく、国内諸問題の処理を牽制している問題の一つともなっているので、早期に解決しなければならぬし、「分祀」や「国立墓地」建設の考案なども問題解決に繋がるものかもしれない。

但し、現在の「靖国神社参拝問題」と鄧小平・胡耀邦時代の「靖国神社参拝問題」との背景は、また違うと思われる。どう違うかという点、当時より現在の「歴史認識問題」が明らかに顕著化している。近年に成立した「自由主義史観研究会」や、「新しい歴史教科書をつくる会」などによる所謂「自虐史観」への批判や、慰安婦問題や南京大虐殺を全面的に否認する動きなどは、今迄の諸「問題」の解決をより困難化し、問題となる深刻な「問題」ではないかと思われる。

冒頭の話題に戻れば、現在、日本国内外の歴史認識に天と地の差が事実として存在している。簡単にいえば、現在の諸問題の源となる戦争の歴史や、A級戦犯を裁いた東京裁判などをどう認識すべきかさへも日本で「問題」になっている現時点においては、「靖国神社参拝問題」を単なる「分祀」などだけでは解決できるはずがないと断言できる。なぜかという点、もしA級戦犯の位牌が別所に移されても、彼らが「戦犯ではなく国のために身を捧げた英雄である」という認識を広げていくなら、また誰かに別所で参拝される可能性があり、そうなると再度近隣諸国に「問題化」されるはずだからである。

問題はA級戦犯らの位牌をどこに移すかということではなく、歴史認識に問題があったのではないかと指摘したい。即ち東条英機らはA級戦犯であるかどうか、戦争は侵略か自衛かなどに対する日本の政府・政治家・国民が持つ認識及び、この認識と近隣諸国の政府・国民の持つ認識との間の「差」にあると考える。「歴史認識問題」が解決しないかぎり、靖国神社参拝問題にせよ、歴史教科書問題にせよ、根本的な問題解決はできないと私は考える。そのために、歴史の事実・真相の究明や、関係諸国の学

者による共同研究を促進することにより、お互いが持つ歴史認識における「差」を次第に縮小させることは極めて重要不可欠な作業ではないかと思われる。

シンポジウムが終わった後の11日、「歴史教科書問題」に関する座談会が、同社会科学院近代史研究所で開かれた。同問題に関する諸国の学者による共同研究のネットワークをつくることも検討された以外に、歴史教科書・靖国神社参拝などの問題をめぐる中国政府の対策は「韓国を戦闘の最前線にし、弱腰を示すものであり、もっと頑張ってもらいたい」という韓国学者の大胆な指摘に対し、中国側の学者は「個人としては政府の対策を必ずしも賛同できないかもしれないが、政府の考えを十分に理解している」と解釈していた。率直な意見交換ができたとしみじみ感じられた。認識に差があるのは当然であるが、事実に基いた理性的かつ誠意ある意見交換などにより、その「差」をなくすことは何よりも大事であると確信している。

SGRAかわらばん番外編

2001年7月18日発行

関口グローバル研究会 (SGRA)

〒112-0014

東京都文京区関口 3-5-8

渥美国際交流奨学財団内

電話 03-3943-7612

ファックス 03-3943-1512

email office@aisf.or.jp

homepage <http://www.aisf.or.jp/sgra/>
